近畿地方のケリについて

Notes on the Grey-headed Lapwing in Kinki, W. Honshu

坂 根 干

Motomu Sakane

I. は し が き

本種は、蒙古・満洲・中央シベリア・中国・樺太・日本・韓国・台湾・印度支那・タイ国・マレー・比国・アツサム・印度の東部に分布し、日本では清棲氏の日本鳥類大図鑑によると、「本州中部以北で（栃木県以北）繁殖し、北海道・本州中部以南・伊豆七島（八丈島 III 1925）・四国・九州にも分布する。」そして渡りは「本州北部（例えば秋田県）には夏鳥として春の2月から3月頃に渡来し、秋の10月から12月頃迄留るが、本州中部（例えば栃木県）では留鳥である。本州中部以南には冬鳥として10月頃渡来し、翌春の4月頃迄留る。」とある。事実誰もそう考えていたのであるが、昨1955年5月機会をえて近畿地方でもケリが繁殖している事実をつきとめることが出来た。

去る1950年以来、阪神地方の鳥の棲息状況を詳細に調査しているうちに、ケリの渡りがどうも不審だと考えるようになった。即ち、冬季三重県北部、京都市郊外及び滋賀県では、10羽20羽と群れになつて棲んでいるにかかわらず阪神地方に現れるのは極めて少く、年間を通じて1~2羽を見るのみであつた（24 X 1943 姫路1羽、小林桂助氏調査；18 XI 1950 西宮武庫川2羽；10. 11. X 1951 伊丹昆陽池2羽；25 XI 1951 加古郡2羽小林桂助氏調査；24 XI 1955 姫路1羽小林桂助氏調査）。

又、伊勢市在住の橋本太郎氏から16 VIII 1954 伊勢市郊外でケリの渡りを見たという手紙をもらつたことがあつて、時期的に早すぎるので奇異な感じを受けた。

このようなことから、或は渡りはしないで鑿庭野や蔬野等の高地で繁殖して

いるのではなかろうかと疑問を抱くようになった。その矢先、当時野外観察に活躍していられた橘川次郎氏から「桑名市郊外で蕃殖しているらしいケリの姿を見た。」と報じられたのである。まことにその観察の功績は大きかった。この橘川氏の一言が直ちに三重県北部での蕃殖確認となり、ひいては京都市郊外での確認、更に三重県南部地方での確認となつたのである。

そこで 1955 年 5 月から、1956 年 5 月まで調査した結果をまとめて報告する。しかし僅か一年間の調査であるから不十分な点も少くないが、その点は今後に於て補足することにした。

この調査にあたり、終始現地で指導された小林桂助氏、発見の端緒を与えられた橘川次郎氏、調査に絶大な御協力を賜つた橋本太郎氏に深く感謝する次第である。

II. 記 載

成長 ♂♀ 共頭及頸は灰鼠色、喉は褐色を帯びた灰鼠色、胸には明瞭な黒帯がある。肩背腰は灰褐色、腹腋尾筒は白色、初列風切は黒、次列風切は白、三

成鳥の頭部

列風切は褐色である。大雨覆は灰褐色で羽端は白い。尾は白色で後半部に黒褐色の中広い帯がある。嘴は先端の $\frac{2}{5}$ は黒色、基部 $\frac{3}{5}$ は黄色、眼瞼と眼先の小肉瘤は黄色（イエローとカドミュームの間）、虹彩はバーミリオン、脚は橙黄色で爪は黒い。翼長は 235 mm

内外、跗蹠 76 mm 内外、嘴長 37 mm 内外。翼角の爪は♂では割に長くて 8 mm 内外、♀では 2 mm 内外で、黒褐色を呈し太さは 4 mm 内外である。

幼鳥 頭及び頸は褐色で、胸の黒帯は非常に不明瞭である。

中雛 頭及肩背は灰褐色で、各羽の縁は先端に近く黒褐色の細い帯があり先端は黄褐色である。喉は白く首は灰色、胸は灰褐色で胸の帯は淡黒褐色である。尾羽は白く、黒い带状の斑は明瞭に見えるがその先は黒褐色で、羽縁は黄褐色

中雛の背の羽毛

A dorsal feather (chick)

中雛の尾羽

A tail-feather (chick)

である。羽軸の先端には生れたときの綿羽が少数残っている。眼先の小肉瘤は小さいが明瞭で、脚は鮮橙紅色である。

幼雛 頭・翼・肩の背部は淡黄褐色と黒色の斑になつていて、腹は白又は黄褐色をおびた乳白色の綿羽で包まれている。

幼雛の背の綿羽

Natal down (chick)

III. 野外での識別

飛翔は緩慢で特に着陸の際は帆翔を多く続ける。警戒するときは中々賑かに鳴きさわくが、警戒せぬときでも飛翔中或は地上に佇立しているときキリッキリッと2声なくことがある。

飛翔中は翼長く、下面から見たときは真白な翼の先端にある黒色が顕著であり、胸の黒帯が極めて明瞭である。背面から見るときは、灰褐色の背に一きわあざやかに見えるのが次列風切と大雨覆の白色であり、また尾羽の白色である。そして翼の先端の黒と尾羽にある逆扇形の黒斑が印象的である。脚は飛翔中は後方に伸し、趾が尾羽より後方に突き出ている。遠くから飛んでいる姿を

ケリの幼雛 1956 年 4 月 22 日京都巨椋にて坂根氏撮影

見ると翼の白色部が空に融けて、ちぎれているように見える。

地上に於ては、背面からは鳥の所在が非常に見難いが、前から見ると胸の黒帯が良くわかる。湿地、湿田を好み、脚が長いので静かに歩行して深い水中に入ることもある。警戒心が強いので普通は中々近寄せないが、蕃殖期には巢や雛を保護するために 10~50 m 位にまで向うから接近してくる。

IV. 棲息環境

大体に於て広濶な湿田を好む。従つて耕作地で麦作等のできない一毛作田の多い地帯に棲み、冬季は 5~50 羽が群れをなし、蕃殖期は夫々一番宛に分散して勢力範囲を定めて営巢する。

三重県の松阪市東南一大淀町一明星一伊勢市の一帯は相当広濶な耕地である。北勢地方では桑名一四日市一白子一津にわたる一帯の村落間の比較的狭い耕地に少数宛分散して蕃殖越冬する。

京都府では、宇治市の巨椋池干拓地に局限されているが、この 700 町歩にわたる広い耕地に 30 番以上のケリが蕃殖し且つ越冬している。最近数年間の観察記録は次の通りである。

ケリの棲息地。1955 年 11 月 13 日 京都にて坂根氏撮影。

三 重 県

16 VIII 1954	2 羽	三重県小俣町	橋本太郎氏観察
9 V 1955	3 羽	同 四日市市東方	同 上
14 V 1955	8 羽	同 桑名市北郊	
15 V 1955	4 羽	同 桑名市南郊	
同 上	3 羽	同 白子附近	車中より観察
同 上	1 羽	同 津市北郊	同 上
同 上	5 羽	同 白子附近	橘川次郎氏車中より観察
24 III 1956	1 羽	同 明星駅附近	車中より観察
3 V 1956	2 羽	同	橋本太郎氏観察

3	V	1956	12 羽	同	大淀町附近	同	上
5	V	1956	6 羽		同	同	上

群飛するケリ。1955 年 11 月 20 日 京都にて坂根氏撮影。

京 都 府

23	XII	1953	約 60 羽	京都, 巨椋干拓地	伏原春男氏觀察 (野鳥 166 より)
28	I	1954	2 羽	同 上	同 上
18	II	1954	5 羽	同 上	同 上
25	II	1954	約 20 羽	同 上	同 上
7	III	1954	約 60 羽	同 上	同 上
21	V	1955	40 羽	京都, 巨椋池干拓地	
22	V	1955	60 羽以上	同 上	
13	XI	1955	29 羽以上	同 上	
20	XI	1955	77 羽以上	同 上	
1	IV	1956	24 羽以上	同 上	

8	Ⅳ	1956	20 羽以上	同 上	
滋 賀 県					
28	Ⅰ	1951	7 羽	滋賀, 瀬田町	Fennell 氏観察
3	Ⅱ	1951	10 羽	同 上	小林桂助氏観察
10	Ⅱ	1951	2 羽	同 上	同 上
11	Ⅱ	1951	10 羽	同 上	同 上
18	Ⅱ	1951	18 羽	同 上	同 上

V. 蕃 殖 地

近畿地方で蕃殖を確認したものは次の通りである。

14	Ⅴ	1955	桑名市北郊下深谷部南	4 番警戒飛翔するを見る
15	Ⅴ	1955	同 北	5 番 同
	同 上		同	3 卵 1 巢発見
	同 上		桑名市西郊北福崎附近	2 羽警戒飛翔
	同 上		同 伊勢朝日附近	2 羽 同
16	Ⅴ	1955	桑名市北郊下深谷部北	4 卵 1 巢橘川氏発見
22	Ⅴ	1955	宇治市巨椋池干拓地	巢立後 10 日位の雛 3 羽観察
	同 上		同 上	同 14 日位の雛 1 羽観察
	同 上		同 上	同 21 日位の雛 1 羽観察
1	Ⅳ	1956	同 上	4 卵 1 巢発見
8	Ⅳ	1956	同 上	4 卵 3 巢発見
12	Ⅳ	1956	同 上	警戒する親 10 番を見る
15	Ⅳ	1956	同 上	1 卵 1 巢, 4 卵 1 巢 小林桂助氏発見
20	Ⅳ	1956	同 上	4 卵 3 巢 森岡弘之氏発見
22	Ⅳ	1956	同 上	孵化間もない 3 雛観察
3	Ⅴ	1956	三重県大淀町附近	孵化 7 日位の 3 雛 橋本氏観察
5	Ⅴ	1956	同 柏原附近	孵化 7 日位の 2 雛 橋本氏観察

この調査により三重県の桑名市—四日市市—鈴鹿市—津市の間及び松阪市—御糸村—大淀町—伊勢市の間の平野地帯並びに京都府宇治市小倉で蕃殖していることがわかった。

然しこれ以外に、滋賀県でも冬季相当数が Fennell・小林桂助両氏によつて確認されているから、その始どが琵琶湖畔で育つたものではなからうか。

VI. 蕃 殖 環 境

三重県桑名市郊外では、大垣市に通ずる国道と長良川右岸堤及び下深谷部の村落に囲まれた、あまり広くない耕地のうち麦作などの出来ない一毛作田の比較的多い地帯を選んでゐた。附近には千鳥類の好きな広い河原があつたし、或は低い草地もあつたが、そこへは近か付こうとしなかつた。そして低湿地を選択するのでタマシギの巣を探しているような気がしたものである。事実、三重、京都を通じてケリの巣を捜索中にタマシギの巣を6巣も見ているのである。始めケリの巣を探す時、関東東北方面の高台での営巣状況から判断して低い草地の生えた乾燥地ばかりを探して随分無駄な骨折りをしてゐたが、最初の巣を発見してからはこの鳥が高台や乾燥地の鳥ではなく元来が湿地を好む鳥であることが分り、以後の捜索は容易であつた。

又人畜の交通のはげしい道路に近いということは、ケリにとつては大した苦痛ではないようである。否それを気にしてゐては自分の好みの場所が得られないのであろう。しかし人や車が通行するたびにケリッケリッと賑かにさわいで警戒しているが（このために橘川氏の目にとまつた）、道路に非常に近い所へも縄張りを作つてゐた。一番近い例は京都で見たもので、道から15mばかりの所に巣を作つてゐた。道路を苦にしないのではなく、気の弱い夫婦は好きな所を先客に占領されて、他に適地が求められないので止むをえず道端に決定したらしい。

京都の巨椋池干拓地は、桃山御陵から眼下に見下ろす一望の平地で、私が子供の頃には巨椋池としてカモ猟に名高い池であつた。それが食糧増産のために排水溝の整備によつて干拓されたところであるから、一望の湿地帯である。その一隅には数戸の農家はあるが、700町歩にわたる広い土地で東北方に高く南に僅かに低いゆるやかな傾斜地で、東北方には畑作もあるが南部は大部分が一毛作田である。そして6月には美田となる。而も大抵の田は冬の間に耕起して畦を立ててゐるので、谷には勿論水がたまり畦の上のかわく事は稀である。

三重県でも京都府でも、何れもこういう土地であるから田植までの4月～6月の間に1～2回は鋤ぎ返され、運の悪い者は切角抱卵していても途中で巣を

放棄させられてしまうわけである。この点同じ環境にあるタマシギと同じように幾度か巣を作り直さねばならぬ運命にあるようだ。しかし抱卵日数と田植の状況から見て2回しか作り直す期間はなく、之も比較的早く第2回目の産卵をさせられたもののみが育雛可能で、5月に入つて作り直したものは孵化せぬうちに鋤き返されるものと推定できる。

更に4月中にもう一度多く田を鋤く方が増収になるという指導をしている京都では、ケリにとつて更に大きな脅威となることは間違いない。

VII. 卵 期

ケリの産卵は仁部富之助氏によると、秋田県では4月2日に雪の中に産んだ第1卵が最も早い記録であるので、当地方でも同様だろうと判断していたが、実際に調査した結果は4月1日には既に4卵を揃えており、4月22日には孵化間もない3雛を観察した。従つて逆算すると3月25日には既に4卵を揃えて抱卵にかかったものと推定できる。本年の調査に4月1日から着手したのが遅きに失したわけである。4卵を揃えるために6日を要するとすると、3月19日には第1卵を産下したことになる。而も之は特別に早いという例ではない。4月1日及び8日に発見した4巣が4卵を揃えていたのであり、親の素振りから見ても抱卵が相当に進んでいることは容易に察しられたし、昨年5月22日に見た雛の大きさからも、当地方では3月中旬には第1卵を産下するのが普通であると考えられる。

三重県の大淀附近で橋本氏が観察されたものも略同様の結論がつけられる。然し第1卵産下の確認は更に明春を期したい。

遅い産卵は、仁部氏によると6月16日4卵の巣で孵化近い卵であつたそうであるが、当地方では桑名で5月16日4卵の巣などおそい方だろうと思う。なぜならば、もう5月下旬からはどの田も田植準備のために鋤き返されてしまうからである。従つて当地方の卵期は3月中旬～5月下旬となる。

VIII. 巢

当地方では一様に耕起された湿田の畦の上、土塊の間の僅かに平らな所を選んで作つている。約1～2cmの深さに土を掘り窪みをこしらえ、極く少量の稻藁を敷いていた。この稻藁は農民が田の肥料として鋤き込んだもので、約

10 cm 内外の長さのものを使用していた。個体により整然とした巣もあれば、敷藁がバラバラに巣の外へこぼれ出てしまつて、卵がちかに土の上に転つていくような乱雑極まる巣もあつた。同様に産下された卵も典型的なチドリ類のように4卵が整つて置かれたものもあれば、乱雑にとりちらかされたものもあつた。巣の外縁はこのように判然としないので、巣の直径は測定困難であるが大体 15~17 cm である。

何等かの事故で作直したときは、縄張りの関係からか前の巣の近くに作つている。私の見た一番近いのは、前の巣と同じ畦の上で約 7 m 距つたところに作り直していた。

IX. 卵

1 巢の卵数は4箇であるが、事故のため作り直す場合は3箇のときもある。卵は緑灰褐色の地に暗褐色及び黒褐色の大小の斑紋が全面に散在するが、鈍端側に僅かに多い。長径 45~49 mm, 短径 33~35 mm の洋梨形である。

X. 育 雛 期

雛は抱卵後 27~30 日で孵化する。孵化直後の雛は全身に綿羽が生えていて色彩はイカルチドリの雛を思わせる。孵化後間もなく歩行を始めるが中々敏拙である。私が畦の上約 20 m を走る間にこの小さな生れたての雛は約 6 m を移動していた。

飛べるようになるには相当日数を要するらしく、孵化後約 20 日位と推定される。親に似た羽色のものでもまだ飛翔は出来ない。孵化後幾日目に飛翔できるかは、私の環境では調査困難であるが、仁部氏によると 48 日を要するようである。

XI. 警戒と擬傷

繁殖期に入ると分散して営巣するが、互に近付くのを嫌うので相当な距離を距てて巣を作る。京都では一番近いので約 250 m であつた。従つて夫々が相当離れているので判然とした境界はなく、境界の附近では他の巣の鳥も混じつて仲よく採餌していた。

一旦外敵が接近してくると、猛烈ないやがらせを行う。彼等の平和なときは

軽くケッケツとないているが、外敵が勢力範囲に近付くと（巣から約 150～200 m 位）先づ警戒の任に当つていた♂がキリッ キリッ と啼きながら舞ひ上つて、迎撃態勢を整える。更に巣に近か付くと、空中から猛烈な急降下攻撃を加えてくる。キキッ キキッ キリッ キリッ ケッ ケッ ケケッ キッ キケーッ キッ キッ キッ キッ と叫びながら私の頭上を高く或は低く飛び交い、水平攻撃、急降下攻撃等の猛烈な威嚇を加える。併しコアジサシのそれ程ではない。一方その周辺に巣を作る仲間がずい分遠方からこの攻撃に参加して外敵の駆逐に全力をあげる。このときの争いは中々の壮観である。併し個体によつてはなまぐさな鳥もいて、すぐ隣の巣の親がこの争いに加わらないで素知らぬ顔をしているのを見たこともある。

又ケリは外敵と仲間との見境がつかないのか、あわてて血迷うのか、巣に近付く者にはたとえ応援してくれている仲間でも容謝しない。応援に来た仲間をもやつつけるのだから面白い。外敵が立去る迄中々執拗に繰返しているが、あまり長時間になると応援隊は誰からともなく立去つて行く。

更に巣に近付いて、巣から 50 m 位にまで近寄つて見ると、抱卵していた♀は静かに巣をはなれ頭を低くして歩き、相当距離はなれてから舞上り夫婦揃つて巣のある反対側 50 m 位のところえおりて静かに様子を見ている。時々小さな声でケリッ ケリッ と啼きながら。卵の時期にはこの攻撃も比較的ゆるいが、雛になれば実に猛烈を極め、その雛が幼ければ幼ない程はげしく攻撃する。

雨天、殊に豪雨のときは卵のぬれるのを嫌つて帰巣を急ぐ。だから敵が巣から 100 m 位も離れていれば巣に帰つてくるが、晴天では個体によつて異なるが 150 m 以上も離れていなければ巣に帰らない。

個体によつては擬傷を行う。巣や雛の近く 20～30 m 附近に近付くと、さき程まで猛烈な攻撃を加えていた♂がサツと目の前 15～20 m 位のところえ舞い下りて翼をひろげて垂れ、尾羽を開いて腰を落とし頭を低く首を伸して極めて拙劣な擬傷を行う。中々根気良く巣から 80 m 附近以上に立去るまで繰返して行つた。擬傷に熱中しすぎて隣りのケリの勢力範囲にまで立入つたため、私の目前で隣りの鳥に攻撃を受けた者もあつた。擬傷は♀も行うが主として♂が行う。

XII. 食 性

ケリの食物は今までに知られているのは次の通りである。

昆虫類 鞘翅目 ゴミムシ、コメツキ、ガムシ、ニワハンミヨウ、水棲昆虫
 膜翅目 クロアリ、アカアリ
 直翅目 ケラ、バツタ、コオロギ
 鱗翅目 シヤクトリガの幼虫
 雙翅目 キリウジガガンボの幼虫、ミズバエの幼虫
 脈翅目 ヘビトンボの幼虫、トンボ

毛足類 貧毛目 ミミズ

両棲類 無尾目 カエル

植物では禾本科のミズヒエの種子。

以上は清棲氏の鳥類図鑑によつたものであるが、今回の調査でこの他にわかつたものは次の通りである。

蛭 類 顎蛭目 ウマビル、シマイシビル

腹足類 櫛鰓目 タニシ

目不詳 小形扁平の貝

植物では禾本科の稲の種子。

XIII. む す び

ケリは近畿地方では留鳥であることが確認出来た。だから阪神方面や姫路などに現れるケリは日帰り旅行又は一泊旅行に出た漂鳥と見るべきである。何れにしても今迄日本各地で冬季ケリが見られるのであるから、この機にそれらの所から蕃殖が確認されることを期待している。(1956 年 6 月記)

Résumé

This is the result of a year research on the breeding ecology of *Microsarcops cinerea* (Blyth), made during May, 1955 and May, 1956 in Kyoto and Mie, the first breeding evidence from western Honshu (first suggested by Mr. J. Kikkawa).

The descriptions of the adult, juvenals and chicks, the field identification, and the sight (since 1951) and breeding (1955, 1956) records in Mie, Kyoto and Shiga, are given. It prefers wet fields, living in winter in flocks of 5-50 birds, but breeds by pairs territorially. In Ogura, Kyoto some 30 pairs breed and winter within an area of 700 Chobu (648 ha). They nest on the ridges of cultivated paddy-fields, often close to the paths, but rather apart from each other, the shortest

distance 250 m. When an intruder approaches within about 100-200 m. from the nest, the male tries successive attacks (most violent when they have young chicks) against him/it uttering sharp notes, helped by the males of the adjacent territories. But, even these helpers are attacked when they come too close to that nest. Many nests are damaged by farmers who cultivate the field once or twice during April and June, thus they often re-nested near the former nest (once as close as 7 m.). The egg-laying season is from middle March to late May; 4 eggs but often 3 in case of re-nesting, the incubation period being 27-30 days. Individual variation is found in the nest (straws mixed in fertilizer are used) and egg arrangement (see photos). Injury-feigning is chiefly done by the male, a bird led the author about 80 m. when it was attacked by the other male of the adjacent territory. Known and newly examined food items are finally given.

香港“星島日報”(1955, 5月12日附)より

譜 鳥 堂 天

究 研 待 有

類 大 四 分 説 拠

種 余 百 二 計 共

之の意は「鳥類の楽天地・研究を期待する・四類計二百余种に分けられる」となる。之に附随の報文の前半は次の如くで、後半は布烈氏の香港に於ける鳥の研究をもつと共同的組織的にせよとの呼かけである。

「昨日(1955, 5月11日)香港大学生物学会で学会のパーティーを開いたが、この会合は特に香港の雀科鳥類を研究する者のためであつた。会中に由主席の竜馬は斯界の専門家布烈氏を紹介した。布烈氏は立つて語り、大体香港の雀科の鳥は四大類別しうと述べた。即ち(一)香港に永久に留るもの約65種、(二)夏季中香港に留るもの約18種、(三)毎年香港を通過して他地方に趣くもの約65種、(四)各季中香港に留るもの123種」(木村重氏・浦和市別所 1312 訳) [木村氏より高島春雄氏宛手紙による] (黒久)

ヒナを抱くケリの親鳥。1956 年 4 月 22 日京都にて坂根干氏の撮影 (本文 25 頁参照)。A Grey-headed Lapwing on nest. At Kyoto, April 22, 1956 (Photo by K. Sakane) (See p. 25).

ケリの巣と 4 卵。1956 年 4 月 12 日京都にて小林桂助氏撮影 (本文 25 頁参照)。A nest and eggs of the Grey-headed Lapwing. At Kyoto, April 12, 1956 (Photo by K. Kobayashi) (See p. 25).